

# 発達障害児のきょうだいの心理的成長過程における

## 母親との意識のズレに関する研究

松岡瑞幸

井上雅彦

(神戸市総合療育センター) (兵庫教育大学発達心理臨床センター)

KEY WORD : きょうだい・心理的成長過程・意識のズレ

### (目的)

本研究では発達障害児の兄弟姉妹(以下きょうだいとする)とその母親から半構造化面接法による聞き取りを行い、きょうだいと母親とのかかわりの中で発達障害児の兄弟姉妹(以下同胞とする)との問題や葛藤を乗り越えていく過程の中で生じる両者の意識のズレとそのズレをどのように小さくすればいいのかということを目的とする。また、それらの結果をもとに、きょうだいや母親に対する適切な心理的支援について考察する。

### (方法)

#### 1) 対象

発達障害児・者(肢体不自由を伴う知的障害児・者)を持つ母親とそのきょうだいを1組として、33組。対象とするきょうだいは中学生以上とし、本人の了承を得た者のみとした。

#### 2) 手続き

質問項目を中心とした半構造化面接法による聞き取りを行った。母親ときょうだいには、過去のきょうだいの年齢段階にさかのぼってもらい、その段階ごとの出来事について聞き取りを行うようにした。また面接は、就学前(3~6歳)・小学校低学年(7~9歳)・小学校高学年(10~12歳)・中学校(13~15歳)・高校(16~18歳)・19歳以降のようにきょうだいの年齢段階別に進めた。

### (結果)

面接の結果から得られたデータの特徴を、各年齢時期別で示す。

#### 1) 就学前(3~6歳) から小学校低学年(7~9歳)

この時期での意識のズレとは、同胞の障害理解についてである。きょうだいは同胞の障害に気づいた時や、障害について母親に質問を投げ掛けて説明を受けた時に、多少なりともショックを受けたという事例があった。一方で母親は、ほとんどの事例がきょうだいは同胞の障害について説明をした時にショックを受けている様子を受けていた様子ではなかった、または同胞との生活の中で自然に障害を受け入れていた様子だったと答えた。

#### 2) 小学校高学年(10~12歳)から中学(13歳~15歳)

中学(13~15歳)では、きょうだいは高校受験時に同胞のことが関係して悩むという傾向があった。悩みの主だったものは、進学後自分が家を出てしまえば、同胞の介助などで両親の負担が増えるのではないだろうかということである。しかし、そのように悩んでいるきょうだいに対して両親は、「あなたの人生だから好きな道に進めばいい」といって、できる限り同胞のことで負担をかけまいとしようと、お互いを思いやる気持ちがズレとなっていた。

#### 3) 高校(16~18歳)以降

この時期にはきょうだいの同胞に対する不安は結婚・出産と親亡き後の2つに絞られてくる。この時期も進学時の悩みと同様に、

きょうだいは将来的に同胞の面倒を見ていこうと考えている事例が大半だった。また、きょうだいの中には学生時代は自分で同胞の面倒を見ていこうと考えていたが、働くようになり現実的には難しいと感じている事例もあった。しかし本研究の大半の母親は、結婚後や自分たちが亡き後にまで今まで以上の負担をきょうだいにかけてさせたくないと思っており、「自分たち亡き後の同胞の心配しなくていい」などといった。そして、今から自分たちの亡き後に備えた準備を進めている事例もあった。

### (考察)

障害理解の意識のズレに関しては、きょうだいは同胞の障害が治らなるとわかりショックを受けたが、その母親はショックを感じているとは知らなかったという事例があった。そのきょうだいはそのショックを口には出さずに自分の中で処理していったと伝え、親には心配をかけてはいけないという役割期待が生じたのではないだろうか。そして、母親はショックには気付かなかったが、その後には同胞のことできょうだいが寂しい思いをさせないよう1対1で話す機会を必ず持つなど配慮を行動で示していたことが、意識のズレを埋めるきっかけとなったのではないかと思われる。

本研究の多くの親は、進学・結婚・親亡き後もきょうだいに負担をかけたくないという思いを持っていた。これに対し多くのきょうだいは、今まで母親と共に同胞の介助など助け合ってきたこともあり、親亡き後の同胞の行く末に関して自分も積極的にかかわりたいと感じているため、母親から「同胞の面倒の心配をせずに、自分の好きな道を進みなさい。自分の生活を大切にみなさい。」といわれると、逆に悩んでしまうきょうだいもいた。母親はきょうだいに対してこれからも同胞のことで話し合う機会を持ち、今後も互いに支え合う意志を確認していくことが必要なのではないだろうか。

きょうだいの各年齢に応じた適切な心理的支援の必要性が指摘されているが、本研究で対象とされた良好な親子・きょうだい関係の中では、これらの役割が母親によって行われていた。わが国においては、きょうだいについての心理的支援システムは十分に整備されていない。意識のズレが生じた時に、その後の母親のきょうだいへの対応がそのズレを埋めるきっかけの一つとなるが、母親のみならず、似通った境遇のきょうだい同士が互いの悩みや不満などを表に出し、その時の解決策を学んでいく機会などのように、家族以外の人間とのかかわりの中からの支援の構築も今後必要かと思われる。アメリカ合衆国における「Sibshop(シブショップ)」、(障害児や慢性疾患児のきょうだい支援の活動)などのような各年齢段階のニーズにそった支援システム作りが必要であると考えられる。

MATSUOKA Miyuki、INOUE Masahiko

